アメリカの南部人によるブラジルの植民地戦略は、さまざまな社会的セクターと連携しながら実行されたが、すでにいくつかの植民地事例を見てきたように、その試みは決して順風満帆ではなかった。ノリス植民地が成功を収めた要因として挙げられるのは、農業植民活動を通じて南部人がブラジル人との協力関係を深め、ホスト社会への不満を軽減し、文化的差異による困難を克服できた点にある。その結果、彼らは次第にホスト社会において確固たる地位を築いていった。ここで強調しておきたいのは、その過程において彼らの宗教観も重要な役割を果たしたという事実である。実際、彼らの農業活動の発展と並行して、1870年代以降、ブラジルにおける米国系プロテスタント教会の伝道活動は次第に活発化していった。そこで今回から、本連載の核心である南部人の伝道活動について、より詳しく見ていくことにしたい。

米国系プロテスタント教会の動向を論じるにあたり、まず時期区分を明確にしておきたい。南北戦争(1861年～1865年)を基点とし、戦前の「アンテベラム期(antebellum)」と戦後の「ポストベラム期(postbellum)」に分け、それぞれの時代に展開された宣教師たちの活動や手段、さらにそれを支えた国是や政治思想にも焦点を当てる。彼らがいかにして「宗教フロンティア」への探究心を育てていったのか、その歴史的・社会的コンテクストを概観することとしたい。

モンロー教書とアメリカ帝国主義

そもそも、なぜアメリカ人宣教師はブラジルで伝道活動を行う必要があったのだろうか。この問いに対しては、単に南部人の植民地が存在したという事実だけでは十分な説明にはならない。実は、アメリカ政府が恣意的に掲げた外交理念の一つである「モンロー主義」が、重要な鍵概念となる。このモンロー主義は、第5代アメリカ合衆国大統領ジェームズ・モンローによって1823年に連邦議会へ提出された大統領教書(モンロー教書)に示された外交方針に基づくものである。モンローの主張の核心は、ヨーロッパ諸国によるアメリカ大陸への植民地支配や政治的干渉を強く牽制し、「欧州諸国は西半球にこれ以上関与すべきではない」と明言する点にあった。アメリカ合衆国は、1776年に独立宣言を發表し、アメリカ大陸で最初に主権国家として独立を果たした国である。一方、ブラジルを含むラテンアメリカ諸国の植民地解放闘争は19世紀に入ってから本格化しており、モンロー主義はまさにこうした独立運動を支援・正当化する目的で表明された外交理念であった。

しかし、モンロー主義は次第にアメリカ帝国主義的なイデオロギーを帯びるようになり、ラテンアメリカ諸国に対するアメリカ合衆国の軍事介入や政治的圧力を正当化する口実ともなった。換言すれば、アメリカは自国の国益を守るため、かつて植民地支配を進めたヨーロッパ列強の後継者として自らを位置づけ、ヨーロッパと対等の立場に立とうとする姿勢を示したのである。このような外交姿勢は、宗教の領域においても影響を及ぼし、米国系プロテスタント教会が、カトリック教徒が多数を占めるラテンアメリカ諸国における「プロテスタント化」を推進する一要素ともなった。この現象を教育史の視点から考察したジャネ・アルメイダは、19世紀を通じて多くのアメリカ人

宣教師がブラジルで活動していた事実に注目している。彼女によれば、彼らは宗教教育を隠れ蓑にしつつ、アメリカ的価値観—すなわち民主主義と共和主義—を、当時立憲君主国であったブラジル社会に浸透させようとしていたと指摘している。

マニフェスト・デスティニーに見るラテンアメリカへの影響

続いて、モンロー主義と並んでプロテスタント伝道の基盤となった「マニフェスト・デスティニー(Manifest Destiny)」について見ていきたい。この言葉は、1845年にジャーナリストで雑誌編集者のジョン・オサリヴァンによって提唱された。彼は、北米大陸を西へと拡大していく「西漸運動(westward movement)」を、神によって定められた運命(destiny)であり、それが誰の目にも明らか(manifest)であると主張した。この言説は、アメリカの領土拡張主義を正当化するスローガンとして広く受け入れられ、国内に急速に浸透し、米墨戦争(1846年～1848年)を引き起こす一因となったと考えられている。実際、この戦争に勝利したアメリカは、当時のメキシコ領土の約半分にあたる現在のカリフォルニア州、ニューメキシコ州、アリゾナ州などの広大な地域を獲得することとなった。

その後、この領土拡張政策は支配圏の射程を広げ、西漸運動に続いて次第に南へと領土を拡大する動きが増幅した。この時点ですでに、「神の定め」にはラテンアメリカ諸国の「脱カトリック化」の理念が組み込まれていた。この点について、アメリカ南部の視点から拡張問題と黒人奴隷制を考察した歴史学者ピーター・アイゼンバーグは、米墨戦争後にキューバ、メキシコ、ニカラグアなどがたびたび米国による軍事的侵略や領土的拡張の犠牲になった事実を強調し、とりわけニカラグアの謎多き傭兵ウィリアム・ウォーカーに注目して議論を展開した。彼は1855年にニカラグアの内戦に加わり、軍の最高司令官となって実権を掌握した。その翌年、ニカラグア大統領に当選すると、故郷のアメリカ南部を慕い、黒人奴隷制を採用、英語を公用語に定め、カトリック教会に代わってプロテスタント教会を奨励した。しかし、大多数がカトリック教徒でスペイン語話者であったニカラグア人はウォーカーの政策に反発し、最終的に彼は失脚して国外追放された。

それでは、ブラジルにはウォーカーのような人物が存在したのであろうか。ブラジルの場合、ウォーカーのような傭兵とは異なり、1人の神学者と2人の宣教師が渡航し、彼らの福音の鐘を鳴らした。彼らはダニエル・パリッシュ・キダー(Daniel Parish Kidder)、ジェームズ・クーリー・フレッチャー(James Coolie Fletcher)、アシュベル・グリーン・サイモントン(Ashbel Green Simonton)である。彼らはアンテベラム期にブラジルで伝道活動を行った、初期のアメリカ人宣教師である。次号では、彼らについて詳しく見ていきたい。

[参考文献]

Janes Soares de Almeida. "Missionárias Norte-Americanas na Educação Brasileira: Vestígios de Sua Passagem nas Escolas de São Paulo no Século XIX". *Revista Brasileira de Educação*. 12(35), 2007, p. 327-342.

Peter L. Eisenberg. *A Guerra Civil Americana*. São Paulo: Brasiliense, 1982.